生活地名からみた中久保集落の空間意識の構成

共同性の空間構成

SPATIAL MENTAL IMAGE OF NAKAKUBO HAMLET BY USING SPATIAL
FEATURES IN NAMING PLACES

Spatial structure of cooperativeness

山崎 寿一*, 重村 力**

Juichi YAMAZAKI and Tsutomu SHIGEMURA

Rural community residents name places in daily life which is passed down from the past.

The purposes of this study mainly (1) to introduce new concept and method of analysis in naming places on spatial structure, (2) to define spatial mental image in Nakakubo hamlet using the above new method.

The naming of place derives from the spatial image of natural features, mental spot and development potential of the area. Using spatial features in naming places, this paper defines the spatial mental image of Nakakubo hamlet ranges in step-like manner and the boundary between each step has distinctive features and place spot.

Keywords : place name, spatial mental image, spatial form and structure, mountain village, Nakakubo hamlet

地名, 空間意識, 空間構造, 山村集落, 中久保集落

1. 研究の目的と方法

本稿では, 先の報告¹⁾に引き続き, 愛媛県上浮穴郡柳谷村中久保集落を対象に, 集落域の空間構造について考察する。前報では, 共同性の平等原則との対応から土地利用, 土地所有の空間構造を考察し, 集落域が主生活域, 主生産域, 保全調整域の3つの領域から段階的に構成されていることを明らかにした²⁾。ここでは, 日常生活圏のなかで, 居住者集団の内部で共有している土地・空間に対する呼称を『生活地名』と定義し, 歴史的な過程により蓄積されてきた生活地名に反映される集落域の空間意識の構成を明らかにする。

地名には, 行政区画名や土地台帳に記載されている字名, 国土地理院の地形図, 一般の地図などで公的に用いられている地名だけではなく, 特定の居住者集団の中だけで通用する日常生活圏のなかの土地に対する地名がある。本研究では, 居住者集団内部で共有している集落域の生活空間の意識的構成³⁾を明らかにするという目的をもち, 後者の地名に着目して, 以下の研究課題にそって

考察する。

- ① 『生活地名』を用いた生活空間(集落空間)の分析手法を提示し, その有効性を検証すること。
- ② 中久保集落で採取された生活地名の分布特性と立地場所による生活地名の性格の相違を明らかにし, 集落域の空間意識の構成を把握すること。

2. 生活地名に着目した空間意識の分析手法

2.1 関連地名研究と生活地名

地名を対象とする研究分野は, 民俗学, 地理学, 言語学, 土木学, 建築学など多岐に及んでいる⁴⁾。そのなかでも柳田国男の「地名の研究」, 千葉徳爾の「新・地名の研究」などの先学の地名研究⁵⁾では, 地名の性格の研究が空間意識・空間構造の解明に重要な手がかりになることが明らかになっている。

地理学・民俗学分野において千葉徳爾は, 「地名は土地と人とを結ぶ一本の糸にも似て, 両者のかかわりをさぐるための手がかりとなること」を指摘し, 「①地名呼

* 豊橋技術科学大学建設工学系 助手・博士(工学)

Research Assoc., Dept. of Regional Planning, Toyohashi Univ. of Technology, Dr. Eng.

** 神戸大学建設学科 助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Kobe Univ., Dr. Eng.

称の中に人が特定の土地をどのような土地の特性、内容に注目して命名したかが示されていること、②土地と人とを結ぶ糸が継続されていればこそ、それをたぐって人とその土地との結びつきかたを知ることができる」という地名の性格と地名研究の可能性を明らかにしている⁶⁾。千葉の研究方法は、生活行為と地名の対象となる場所とのかかわりに着目し、空間的配置関係をとらえている点は筆者らと共通の基盤にたつ。しかし、地名の由来、名称としての性格と生活行為および場所との関係についての関心をもたない点で筆者らの方法的関心と異なる。

筆者らは、建築学・地域計画分野において地名分析を先駆的に導入した(1973年、象グループ 大竹、中村、平井、重村)。今帰仁村における方言地名の研究では、集落の集団主体が共有するよそものには通じない地名と、その土地・地形・景観に着目することにより、生活者にとっての地域空間像をとらえようとする試みを行い、地域計画の方法に用いた⁷⁾。方言地名は、地形図や公称地名に対し、それより小さい地名を指している。ここでは独立言語に近い性格をもつ沖縄方言において、さらに集落や集落群での方言の違いがきわめて濃厚に残る特徴に着目して「方言」地名というネーミングを行った。

筆者らの「生活地名」に関する最初の研究発表は、1983年であるが⁸⁾、地名に着目したすぐれた生活空間研究として寺門征男、齊木崇人の研究がある。寺門の研究⁹⁾は、地景名に着目した景観構造の把握に研究の関心がある。齊木の研究¹⁰⁾は、地形条件と集落立地、空間構成の対応を上代語による地形の型から考察したものである。本研究の視点とは、若干関心の重点が異なっている。

本研究では、沖縄における方言地名の研究をより一般化し、①日常生活圏の土地・空間に対する呼称、②居住者集団の日常生活の中で共有されている土地・空間に対する呼称を対象とし、その名称の性格、場所の特徴、生活行為と名称および場所の関係を分析する。そのために、より一般的な用語として、「生活地名」という新たな用語を定義し、提案する。

2.2 生活地名分析の手法

生活地名を用いて、集落域の空間意識の分析を行う場合、①どのように生活地名を採取し、生活空間の分析の対象として把握するのか、②生活地名をどのような分析指標として処理し、分析結果をどう読み取るのかが検討されなければならない。以下では、中久保集落での生活地名の採取方法、生活地名を用いた空間意識の分析手法について述べることにする。

(1) 生活地名の採取と確認作業

生活地名の採取は、集落居住者からのヒアリングによって、地名の名称と由来、地名に対応する場所、土地利用¹¹⁾を把握した。1982年から86年までの調査では、各所帯の隠居・当主世代(1900年生まれから1940年生

まれのもの)を中心に生活地名を採取し、さらにほぼ全員の集落在住者から、採取した生活地名が共有されていることを確認した¹²⁾。特にみつまた焼畑時代からの生活体験をもつ古老数名からは、生活地名の名称の意味や由来、対象となる土地の範囲や利用形態、生活地名の変化¹³⁾について、数度にわたってヒアリングを行った。

また、生活地名の採取の補足作業として、旧地籍簿(土地台帳)中の字名の採取も行った。土地台帳に記載されている字名については、石川県のようにイロハと通し番号による符号に置き換えられて、地名が公簿から消滅してしまっている場合¹⁴⁾や、地筆の統合によって消滅している場合¹⁵⁾もある。中久保集落の旧地籍簿では、地番は甲地番(宅地、農地)、乙地番(山林その他)に分けられ、具体的な字名と地番が併記されている。

字名を生活地名としてそのまま用いることには問題も多く、現地で採取された生活地名と土地台帳に記載されている字名の照合が必要となる。土地台帳の字名と中久保集落で採取した生活地名の照合では、①土地台帳に記載されている字名は大部分、生活地名と一致していること、②台帳に記載されていない生活地名も存在すること、③台帳に記載されていない生活地名の多くは地点名や施設名であること、④生活地名の範囲は地籍図の字名の範囲とは厳密には一致しておらず現地での確認作業が必要となることがわかった。

採取された生活地名や字名は、いくつかの条件設定を行って、生活地名分析に用いる指標として処理することが必要である。ここでは、以下に示した生活地名の確認作業を行い、生活地名の分布、範囲を地図上におとし、屋敷群周辺部分(集落レベル)、集落域全域(集落域レベル)の2種類の「生活地名分布図」を作成した(図—1、図—3参照)。

- ① 土地台帳に記載されている字名と生活地名の相違がみられるときには生活地名を優先させる。
- ② 屋敷群周辺については1000分の1の地籍図や土地利用図によって生活地名の分布と範囲を確認する。
- ③ その他の場所については、2500分の1の地籍図や森林基本図によって上記と同様の確認作業を行う。

(2) 生活地名分析の指標

このような過程を経て採取・確認された生活地名を空間意識の分析に用いるために、以下の分析指標を設定した。

① 生活地名分類(名称由来からみた分類)

地名は、焼畑、造林、開墾などの生産活動を含む生活行為や災害防止のための環境管理上の必要から、重要な意味をもつ地形条件、開発に適した土地条件、立地する建物やランドマークとの対応から名付けられている場合が多い¹⁶⁾。ここでは、地名の名称そのものに、土地・空間を利用しようとするものの意識が反映されていると考

表一 中久保集落における生活地名分類（名称由来からみた分類）

生活地名の分類	主な生活地名
類型Ⅰ：固有地名 ①社会地名：屋号、屋敷群、近隣集団を示す地名 ②施設地名：共同施設などの存在を示す地名 ③位置地名：集落での位置を示す独立した地名	マダ、ヨシダ、カハ、カハル(カハル) ヒメジヨ(カハル)ウ=テマヤ ヒダ、ニシ、トッパナ、マヤ
類型Ⅱ：相対地名 ④相対地名：他の地名との位置関係を示す地名 ナカ、シモなど集落域における位置	マノナ、ニシナ、ニシバ、カハナ マカハ、カハナ、ナカ、マノナ
類型Ⅲ：利用地名 ⑤利用地名：田畑、キビなど土地利用を示す地名 ⑥分割地名：カミなどの接頭語+利用地名	カハ、ナカ、カハ、カハ、カハ カダ、カミナ
類型Ⅳ：地形地名 ⑦地点地名：淵、石、滝に対する名称 ⑧微地形地名：緩斜面、崖、小さな谷などの名称 ⑨大地形地名：山、谷一帯に対する名称	イカ、カ、カ、カ、カ、カ、カ、カ カ、カ、カ、カ、カ、カ、カ、カ カ、カ、カ、カ、カ、カ、カ、カ
類型Ⅴ：信仰・伝説地名 ⑩信仰地名：信仰の対象となる場所・施設の名称 *ヤマノカミダキは、ヤマノカミ+タキであり複合地名が多い。 ⑪伝説地名：伝説や言伝えのある地名	テマヤ、カハ、カハ、カハ、カハ カハ、カハ、カハ、カハ、カハ カハ、カハ、カハ、カハ、カハ
類型Ⅵ：その他意味不明のもの	カハ、カハ、カハ、カハ

備考) 採取した生活地名を村民ヒアリングに基づき分類。

* 信仰・言伝え+地形のような複合地名は、信仰・伝説地名とした。

え、集落域の土地・空間に対する居住者集団に共通した意識を読み取る手がかりとした。

既往の地名研究では、地名の語源の分析が数多く試みられている。しかし安易な語源解釈も多く、地名の一般的な分類や解釈をそのまま特定地域に用いることは適切ではない。ここでは既往研究の地名分類¹⁷⁾、地名解釈は参考にとどめ、あくまでも居住者からのヒアリングによって地名の名称由来、意味を聞き出すことを重視した。

採取した生活地名を名称由来から整理すると、中久保集落の生活地名には、家や組の名がそのまま地名になっているものや集落における位置関係を示すもの、土地利用を示すもの、大地形や微地形を示すもの、信仰や伝説、言伝えをもつ地名がある。さらに周囲の生活地名との相対的な位置関係を示す地名や、地名と場所の対応はみいだせるが、地名の意味は不明であるものも存在していることがわかった。さらに名称由来と生活行為・土地利用との対応を踏まえて生活地名を分類すると、生活地名は表一に示した6つの大分類と12の中分類（意味不明を含む）に整理できた。この表より、名称の意味や由来から、生活地名の性格を読み取る手がかりが得られる。

② 生活地名面積

「多くの場合、地名は地点・地区の意味・場所性を表現していると同時に地名に対応する土地空間の限界・面積を有しているが、中には地点・地区のみを示し限界・面積がはっきりしないものも存在する」¹⁸⁾と柳田国男が指摘しているように、土地の相対的なひろがりに対応して地名がつけられている。ここでは地名の及ぶ範囲を、生活地名面積とし、先の作業で作成した生活地名分布図

からその面積を算出した。

生活地名面積は、それが大きい場合は空間に対する意識が疎であり、小さい場合は密であると考えることができ、空間認識の稠密性の相異を示す指標となる。ただし、生活地名面積の大小は、相対的な比較であり、周囲の生活地名との関連が重要である。

③ 平均一筆面積

平均一筆面積は、生活地名面積を筆数で割った値で、土地利用の稠密性を示す指標となる。

平均一筆面積は、「入用の多い地面は地名が多く、入用の少ないものは名前の少ないのが通則」¹⁹⁾という柳田国男の指摘を参考に、土地分割が多いところは、土地の利用が盛んであるという考えを、より客観化するために設定した指標である。

3. 中久保集落の生活地名の分布にみる空間意識の構成

3.1 中久保集落における生活地名一覧

中久保集落の集落域では108の生活地名を確認することができた。

表一2の生活地名一覧表では、生活地名の分布の特徴をみるために、集落域における場所ごとに（地区別に）生活地名を整理し、生活地名分類、地名に対応する範囲の土地利用、生活地名面積、平均一筆面積、住居からの距離を示した。表の左側は、住居・集落から約1km圏域に分布する生活地名、右側にはその外縁に分布する生活地名を地区別に掲載してある。これらの生活地名の性格を示す諸指標により、以下の考察が可能になる。

3.2 集落域における生活地名の性格

(1) 屋敷群・集落周辺の生活地名（集落レベル）

屋敷群周辺は、家と家の交流、自給作物の栽培など日常生活活動の最も濃密なエリアである。まず、屋敷群の周辺から生活地名の分布状況を見ることにする。

図一1は集落レベルの生活地名分布図である。ここでは、山腹に立地する西目（ニシメ）、下目（シタメ）の屋敷群周辺の土地利用、地形状況と生活地名の分布を示し、図一2には、地形との対応を示した。

屋敷地（宅地）の生活地名には、マツダ、ナカムラ、ヨシダなどの家名やコウナルといった近隣集団名がそのまま用いられる場合（社会地名）と、ニシ、ヒガシ、トッパナなど、集落における位置関係を示している場合（位置地名）がある。これらの生活地名には固有名詞が多く、いずれも固有性の高い生活地名（固有地名）といえる。住居や屋敷群は、家族生活や社会生活の最も濃密に展開する場所であり、きめ濃やかに生活地名がつけられている。

これらの屋敷地に隣接する一帯には、屋敷地の生活地名との相対的な位置関係を示すニシノマエ、ニシノナロ、タクチノヒガシなどの生活地名（相対地名）が付けられ

図-1 集落レベルの生活地名分布図-西目・下目の屋敷群・集落周辺

ていたり、ハナノキ、サクラといった目印となる特徴的な地形と関連した生活地名（地形地名）が付けられている。これらの土地は隣接畑から続く常畑で、黍や蕎麦、野菜などの自給用作物が栽培されている。村民ヒアリングによると、ハナノキの「ハナ」は突起した丘状の地形条件を示す一種のランドマークで、「サクラ」は崖を示す生活地名である。屋敷群周辺の常畑全体をコヤシと総称する場合もある。

その外周には、ウシノダバ、サコ、ムネ、タニオクなどの微地形を示す生活地名やフルタ、カミバタといった土地利用を示す生活地名が分布している。これらの土地は、焼畑時代には小規模な焼畑が行われたり、常畑や一部は水田としても利用されていた。現在では放棄され、雑木林になっているが地名は継承されている。

屋敷群・常畑の外縁には、お堂・公会堂の立地するテラヤマ、かつて神社が立地したオタビ、山の神が休養をとるといふ伝いのあるヤマノカミ（ヤマノカミノハネヤスミともよばれる）があり、そこにはもみの木の大きな木が植えられている。テラヤマは、隣接する古味集落から中久保集落への入口、オタビ、ヤマノカミは、山腹に

注) 縦軸は標高、()内は焼畑時代の主な土地利用形態
*切断方向は図-1参照

図-2 集落周辺の地形断面図-生活地名と地形・土地利用の対応

立地する西目、下目の近隣集団と川沿いの川成の中間に立地している。テラヤマは、そこにお堂や公会堂（集会所）が立地することから、オドウやコウカイドウと呼ばれる場合もある。

一方、屋敷群・常畑に比べて、その周辺部では生活地名面積が大きくなる。しかし、地点・場所のみを示し限界や面積が不明確なものや、隣接する生活地名に比べて小さな生活地名面積の生活地名が分布する場合もある。

このような場所には信仰空間・共同空間が立地する場合が多く、オタビ、ヤマノカミの生活地名面積は、周辺のタニオクやフルタといった生活地名と比べると著しく小さい。西目、下目の2つの屋敷群の間にはセイマイジョが立地している。この場所は、かつてはツジやサクラと呼ばれた場所である。村民ヒアリングでは、昭和30年代中ごろに集落の共同精米所が建てられ、その後、このあたりをセイマイジョと呼ぶようになったという。これは、生活地名が変化した数少ない事例である。

また、ヤスミイシは、耕作からの帰り道ではじめて集落のみえだす地点であり、集落からの声がとどく限界で

もある。そこでは、耕作からの帰路で必ず一休みするという。このヤスミイシも周辺の生活地名面積と比較すると生活地名面積が小さい（図-3 参照）。

北東に隣接する古味集落との境界にはショブガクボという場所がある。ショブガクボは、かつて古味との境界争いの勝負にけりをつけた窪地という言葉がある。

まとめてみると、集落周辺の生活地名の分布には、①屋敷群を中心にきめこまかに生活地名がつけられていること、②固有性の高い生活地名が多く存在すること、③住居から遠ざかるに従って、固有地名から相対地名、微地形地名・利用地名へと生活地名分類が変化する傾向にあること、④住居を中心として順次外へひろがるに従って、生活地名面積が大きくなる傾向があること、⑤山腹の2つの屋敷群（近隣集団）と川沿いの屋敷群の中間や隣接集落との境界には共同施設や信仰・伝説を伴う生活地名が存在していることなどの特徴がある。

（2）集落域レベルの生活地名

図-3は、集落域レベルの生活地名分布図である。また図-4は、生活地名分類からみた生活地名の分布、図

図-3 集落域レベルの生活地名分布図

—5には生活地名面積、図—6には平均一筆面積からみた生活地名の分布を示した。

図—3からわかるように、集落域レベルの生活地名は、谷や山を単位に分布する傾向にあり、地形条件との結び付きが強い。しかし、標高1000mを超える奥地では、生活地名の分布密度が低下し、さらに地形条件との対応もはっきりしなくなる。

図—4に示した生活地名の分類（名称由来）からみた地名分布を見ると、集落域奥地では大地形地名や伝説地名が多く、集落域中部の北斜面では、意味不明の地名が多くなる。

意味不明の生活地名が分布する場所は、人が入り込むことが少ない場所である。この場所は、みつまた焼畑時代においても、未利用地（天然林）が多く分布し、居住者が足を踏み入れることもほとんど無かったエリアである。最高齢の古老でも、地名の名称はわかるものの地名の由来や意味を知らず、数十年いっていない場所もあるとのことであった。

それに対して土地の利用が盛んであった北部南斜面では、微地形地名が多く分布し、集落近郊には微地形地名や利用地名が特に多くみられる。この場所は、みつまた焼畑時代の主要な焼畑耕作区²⁰⁾で、その後、植林されたところである。ここでは、みつまた焼畑時代からの生活地名が現在においても継承されている。

また河川の流れが緩やかな淵の周辺には、田畑が開かれたり、炭焼きのための出作り小屋が立地する。この場合、ダイコンブチやヨイチフチなどランドマークとなる地形のスポットが生活地名となっている。集落最奥地の川の淵はヒメガブチと呼ばれている。この地名は、おと姫伝説にちなんだ信仰・伝説地名で、現在も信仰の対象となっている。この場合、地点名が地区名を代表しているが生活地名の限界や面積は明確ではない。

図—5、図—6に示した生活地名面積、平均一筆面積から生活地名の分布傾向を見ると、集落域の奥地に入るほど、生活地名面積・平均一筆面積が大きくなる傾向がある。しかし、隣接集落との境界（出入口）では必ずしも大きな生活地名にはなっていない。

隣接集落との限界の生活地名を見ると、古味集落との境界にはショブガクボ、横野集落との境界にはヤマノカミダキ、高知県梺原町との県境にはイシブネ、ミツケイシ、野村町との境界にはヒメガブチの生活地名が確認できた。これらはいずれも信仰地名、伝説地名であり、強く意識された場所といえる。

3.3 住居からの距離からみた生活地名の分布特性

これまでの生活地名分析をまとめる意味で、「住居からの距離」別に、生活地名の分類、生活地名面積、平均一筆面積を整理したものが表—3である。この表から住居からの距離によって、生活地名分類、生活地名面積、

図—4 生活地名分析図（1）—生活地名分類

図—5 生活地名分析図（2）—生活地名面積

注) 平均一筆面積500㎡未満は図には表示していない。

図—6 生活地名分析図（3）—平均一筆面積

平均一筆面積の特徴も異なり、生活地名の分布・立地には、一定の傾向があることがわかる。

住居から 300 m 圏域では、55 の生活地名が存在し、その数は集落域全体の約 5 割を占めている。この圏域の生活地名は、①100 m 以内では固有地名を中心に、それに隣接して相対地名が分布すること、②その外周では相対地名、微地形地名、さらに 300 m 圏域では微地形地名が卓越して分布していること、③テラヤマ、オタビ、ヤマノカミといった信仰地名がこの圏域の外縁部に立地していること、④生活地名面積、平均一筆面積が全体的に小さいなどの特徴がある。

住居から 300 m から 1 km 離れた圏域では 12 の生活地名が分布し、利用地名が最も多い。さらに遠ざかるにしたがって、生活地名の分布密度は小さくなる。

それに対して 1 km から 2 km 圏域では微地形地名が多く、2 km から 3 km の圏域では大地形地名、3 km 以上離れた圏域では大地形地名、意味不明の地名、信仰地名が多くなる。生活地名面積、平均一筆面積に着目すると、集落域奥地になるほど大きくなる傾向があり、3 km 以上離れた集落域奥地では、生活地名面積が 25 ha、平均一筆面積が 5 000 m² を超える生活地名も多く立地する。

このように集落域は、生活地名が密に分布する集落周辺 (1 km 圏域、特に 300 m 圏域)、大きな生活地名 (生活地名面積が大きい) が分布する集落域奥地 (3 km 以上)、その中間地帯に区分できることがわかる。

表—3 では、生活地名分類、生活地名面積、平均一筆面積の数値が、いずれも右下がりとなっている。これは、住居から離れるに従って、生活地名分類が、固有地名、相対地名から利用地名、微地形地名、大地形地名、信仰地名へと変化し、生活地名面積、平均一筆面積も、住居から離れるに従って面積が大きくなる特徴を示している。

このように集落域全体として、空間意識の段階的な構成を確認できたが、集落域には周辺の土地より強く意識されている空間があることにも注目しなければならない。それは、共同施設や信仰スポットが立地する場所である。この場所は、生活地名面積が小さく、ランドマークの存在を示す生活地名や共同施設の存在、信仰の対象を示す生活地名の存在する場所である。集落周辺におけるテラヤマ、オタビ、セイマイジョ、ヤマノカミ、その外縁に存在するヤスミイシ、ヤマノカミダキ、隣接集落の境界に存在するジョブガクボ、ヒメガブチなどの生活地名がそれである。

4. まとめ

本稿では、『生活地名』を新たに定義し、生活地名分類、生活地名面積、平均一筆面積を指標とした生活地名分析

表—3 集落域における生活地名の分布特性 [住居からの距離別]

領域区分	主生活域 / 主生産域 / 保全調整域							
	100m 未満	100m 200m	200m 300m	300m 1km	1km 2km	2km 3km	3km 4km	4km 以上
計	20	18	17	10	12	8	8	15
生活地名分類	類型Ⅰ：固有地名							
	①社会地名	4	4					
	②施設地名	1	1					
	③立地地名	5	5					
	類型Ⅱ：相対地名							
	④相対地名	15	6	5			2	
	類型Ⅲ：利用地名							
	⑤分節地名	3		1	1			
	⑥利用地名	12		3	1	1	1	
	類型Ⅳ：地形地名							
	⑦地点地名	9	3	2	1	1		1
	⑧微地形地名	24	1	3	12	2	5	1
	⑨大地形地名	8				1	3	3
	類型Ⅴ：信仰地名							
	⑩信仰地名	6		3	1	1		1
	⑪伝説地名	10		1			1	6
	類型Ⅵ (不明)	11		1	2	2	2	4
生活地名面積	A 0.1 ha未満	33	12	12	6	1	1	2
	B 0.1 ~ 1ha	27	8	6	3	1	1	
	C 1 ~ 10ha	20			5	3		2
	D 10 ~ 25ha	12			3	3	1	3
	E 25 ~ 50ha	9			1	1	1	6
	F 50 ~ 100ha	6				2		1
	G 100 ha以上	1						1
平均一筆面積	a 500 m ² 未満	43	17	12	6	3	2	2
	b 500 ~ 1000m ²	13	2	4	3	4		1
	c 1000 ~ 2000m ²	15	1	2	6	3		1
	d 2000 ~ 3000m ²	8			2	4		1
	e 3000 ~ 5000m ²	15				4	5	4
	f 5000 ~ 10000m ²	13				1	6	6
	g 10000 m ² 以上	1						1

備考) 表—2より作成。

領域区分については参考文献②参照。

・住居からの距離は西目と下目の中間に位置する精米所から旧道を利用した場合の到達距離。川成の周辺は、川成の中心からの距離。

図—7 生活地名からみた集落域の空間意識モデル (表—3 に対応)

の手法を用いて、その分布特性を明らかにした。この生活地名に反映された集落域の空間の意識の構成とその性格を総合化したものが、図—7 に示すモデル図である。以下では、生活地名分析によって明らかになった知見を示し、本稿のまとめとしたい。

- ① 集落域の空間意識にも、前報で明らかにした主生活域、主生産域、保全調整域の 3 つの領域から段階的に構成されている集落域の空間構造 (土地利用や土地所有の空間構造) との密接な対応がみられること

- ② 生活地名の性格は、屋敷群周辺から集落域に至るにつれて、固有地名から相対地名、利用地名、地形地名、伝説地名へと展開し、生活地名面積・平均一筆面積は順次大きくなること
- ③ 集落域の段階構成の結節点では信仰地名や共同施設の存在を示す生活地名が存在し、集落域の空間意識の構成に秩序を与えていること
- ④ すなわち、集落域の生活空間のひろがりの意識的構成は、住居から集落境界に至る段階的な空間構成をもち、領域構成の節目となる空間の存在が強調されることによって秩序づけられていること

本研究では、地名の呼称と対象となる土地の生活的意味を空間的に明らかにし、集落域の生活空間のひろがりの意識的構成を明らかにすることができた。この点においてこれまでの地名研究を補うことができた。

研究を総括して、重要な問題が残されていることに気づく。すなわち、生活地名は歴史的に変容するものであり²¹⁾、その点に関する考察は方法的に大変困難であることである²²⁾。ひとつの問題として、現代の二拠点型生活が進行した状況下では、世代の相違、古老・壮年と若者ではその生活地名認識が、ここで記述したことをこえて、空間の意識を共有していない可能性がある。本研究では1982年から86年までの調査において隠居・当主世代(1900年生まれから1940年生まれのもの)を中心にはば集落在住者全員を対象に生活地名の採取を行った。この世代の後継者は、中学・高校就学時に集落を離れ、その後流出、または二拠点型生活に移行している世代であり、現地来訪時にこの世代から1000ha、高低差400mに及ぶ集落域の生活地名認識を調査・採取することには多大な困難を伴う。戦後生まれの後継者世代の生活地名分析は今後の課題としたい。

注 釈

- 1) 参考文献1), 2)を参照。本稿は、四国山村・中久保集落を対象とする一連の研究の一つで、研究の全体像、位置づけについては、参考文献1)を参照。
- 2) 参考文献2)を参照
- 3) 生活空間の意識的構成が居住者集団(主体)によって一定の共通像をもつことについては、K. リンチをはじめとする研究や、環境心理学の諸研究でも実証されているが、集落域の分析については研究が少ない。
- 4) 柳田国男の『地名の研究』(1936年、『定本柳田国男集第20巻』筑摩書房)、地名地理学を確立した鏡味完二の『日本地名学』(1957年、日本地名研究所)は地名研究の先駆的論文である。土木学では、土木技術者の立場から地名と災害の関係を論じた小川 豊の『危険地帯がわかる地名』(1983年、山海堂)がある。また『地図と地名』(1974年、古書院)には、山口恵一郎、鏡味克明による主要地名研究の文献目録がまとめられており、地名研究のひろがりがわかる。

- 5) 参考文献3), 4)を参照
- 6) 参考文献4)参照
- 7) 『都市住宅 発見的方法—吉阪研究室の哲学と手法』(1975年8月号)。平井秀一:「方言地名」(重村力監修『まちづくりの新しい視点をさぐる用語キーワード50』、建築知識別冊ハンディ版第3号、1982年所収)などを参照。
- 8) 参考文献5)を参照
- 9) 寺門征男:空間言語<地景名>からみた集落空間の組織化と構成原理について—農村集落の空間的秩序性に関する研究・その1(日本建築学会計画系論文報告集、第416号、1990-10)。寺門論文では、『空間言語』を「集落に居住する生活集団が、彼等の生活を共有する場所と空間にたいして名付けかつ現在まで受け継いできた<地景>の呼び名または呼称のことで地景名にあたる言語」と定義している。
- 10) 齊木崇人『農村集落の地形的立地と空間構成に関する研究』、1986年(学位論文)
- 11) 土地利用は、土地を利用するという生産活動である。土地利用と生活地名の対応を考察することは、生産活動を含む生活行為と生活地名のむすびつきをみることでもある。
- 12) 本研究では、集落に居住するほぼ全員から日常生活行動や土地利用についての悉皆ヒアリングを行っているが、その過程で採取した生活地名が全員に共有されていることを確認している。
- 13) 本研究では、みつまた焼畑時代の生活体験をもつ各所帯の隠居・当主世代(1990年生まれから1940年生まれ)を対象に生活地名の採取を行っており、みつまた焼畑時代以降の生活地名の変容については調査を行っている。今回の調査からは、大部分の生活地名が、みつまた焼畑時代以降も継承されていることが確認できた。
- 14) 柳田国男の「石川県などは地租改正の当時、ほとんど全部の字以下の地名をイロハまたは甲乙丙丁等にしてしまった場合もある。」という指摘(参考文献3)。筆者の輪島市上大沢集落の生活地名調査では、①市役所の土地台帳では字名は甲、乙、イ、ロ、ハ、一、二、三の符号のみで表現されていること、②集落では字名と異なる生活地名が日常生活において存在していることを確認している。
- 15) 柳田国男は「明治9年に切絵図をつくるとき、地図をつくる便宜上、数字で地面を呼ぶようになった。その際、ある種の操作が行われた。その結果、一部の地名が統合され、新たな小字の下の地名が公簿上消えることになった。また地名と地番の厳密な照合が行われず、境界のずれがある結果となっている。」と地租改正の当時の状況を述べている。(柳田国男「地名の話」、『信濃教育』523号、1930年、『地名の世界』1982年、古今書院に再録)また、近年の国土調査に伴う地籍簿の整理によって、字名は数字の番地に置き換えられ、公簿から消滅している。
- 16) 参考文献3)を参照
- 17) 柳田国男は、土地利用の発達に着目して、「①利用地名:土地を利用する必要からまず目印的に生まれた地名。②占有地名:土地の利用が進み、個人や一族が土地を占有することから名づけられるもの。比較的新しいもの。③分割地名:土地の利用がさらに複雑化し、すでに区画された地域をさらに細分することから生じた名称。上中

下, 東西南北, 大小, 新, 元などの接辞を使用する。最も新しい。」の分類を示している。また山口恵一郎は, 「①自然環境を端的に表現した地形語, ②土地制度や税制または政治・軍事などに関連して与えられた法制的・政治的な意味の法制語, ③狩猟や漁労や農耕, または交換経済, 共同生活など, 住民の生産・流通に関連して発生した社会経済史的な意味の社会語, ④進行・民俗・口碑・伝承・衣食住など, 素朴な生活の中から生まれた生活語」の4つの類型による地名分類を示している。これらの分類は小地名に限定したものではなく, 一般的な地名を対象としたものである。

- 18) 参考文献3) より引用
- 19) 参考文献3) より引用
- 20) 土地利用の変遷については参考文献1), 2) を参照
- 21) この点については, 末原達郎(人類学)が「ムラ空間の環境認識の変遷」において, 岐阜県石徹白の土地に対する呼称に着目した環境認識の変遷を明かにし, 山林利用の低下に伴う地名の消滅, 地名の拡張を報告している。(石毛直道編著『環境と文化』, NHK 出版, 所収) その概要については拙稿「集落空間のモデル」で紹介している(参考文献6) 所収)。また, 注8) の寺門論文では, ゴルフ場開発に伴う未利用地の地名の消失が指摘されている。中久保集落では, 昭和30年代に集落の共同精米所が建設された場所が, セイマイジョという地名に変化している。物的な施設名が新たな生活地名に転化した数少ない事例である。
- 22) 生活地名は, 歴史の過程で蓄積され, 継承されるもので

あるが, なかには忘れさられ継承されていない地名もある。本研究では, 集落に居住する集団によって共有されている地名を採取し, 分析した。過去に存在していても, 現代に継承されていない地名は採取していない。次世代に継承されていない過去の生活地名を, 当時の生活体験をもたない居住者から採取・調査することはできない。本研究でみつまた焼畑時代以前の生活地名について言及していないのは, このような方法的困難さがあるからである。

参考文献

- 1) 重村 力, 山崎寿一: 中久保集落における共同性の展開過程—共同性の空間構造, 日本建築学会計画系論文報告集, 第424号, pp.101~108, 1991年6月
- 2) 山崎寿一, 重村 力: 中久保集落における集落域の土地利用と土地割形式—共同性の空間構造, 日本建築学会計画系論文報告集, 第443号, pp.133~141, 1993年1月
- 3) 柳田国男: 『地名の研究』1936年(『定本柳田国男集第20巻』, 筑摩書房に収録)
- 4) 千葉徳爾: 『新・地名の研究』筑摩書房, 1982年
- 5) 重村 力, 山崎寿一ほか: 四国山村・中久保の研究(その4)—生活地名・土地所有形態からみた集落域土地利用秩序, 1983年, 日本建築学会近畿支部研究報告
- 6) 日本建築学会編: 『図説 集落—その空間と計画』1989年, 都市文化社

(1992年11月10日原稿受理, 1993年6月28日採用決定)